

10年前、世田谷の八幡中の修学旅行で訪れた気仙沼が大震災と津波で未曾有の被害を受ける様子をテレビで見て愕然とした。お世話になった畠山重篤さんは!気仙沼大島の方々は!消息を心配し、何でもできることを!と、成人し、社会人となった教え子と同僚が集まり、何とか連絡の付いた気仙沼市役所宛に義援金と義援物資を送った。その後、連絡の取れた畠山さんへの支援が、カナディアンアカデミーのミッチーこと難波さんの仲介で実現する運びとなった。本当に感謝している。

八幡の教え子と、今勤務している新宿西戸山の子どもたちと活動の輪を広げ、たくさんメッセージカードが届いた。是非、それを直接畠山さんに渡したい!子どもたちの思いを直接伝えたい!今回の気仙沼行きはこの思いと、これからの支援を考える上で、被害の現実を直視したいという二つの思いがあった。

新幹線から降りた一閃。町の中いたる所に建物破壊があり、被災地に入ったことを実感した。気仙沼に向かう在来線の中では、大切なご家族を亡くされた女性に会い、お話を伺った。彼女は行方不明になった母と兄を捜し、様々な遺体安置所を回ったという。お母さんは被災して間もなく、お兄さんは何週間かして見つかったのだそうだ。まだ、被災した実家には辛くて行かれないとおっしゃった。今日は埼玉の自宅から一回忌のために帰省したとのことだった。出迎えてくれることのない実家に帰る気持ちはいかばかりか、直接の被害は受けなくてもこうして辛い思いをしている方がたくさんいらっしゃる。これが今回の震災が未曾有の被害と言われる理由の一つなのだと実感した。

気仙沼駅に着き大島に向かうために港へ歩く。港に近づくたびに被害の状況が明らかになった。水に浸かった建物が増えてくる。一階部分が破壊され、もぬけの殻になった建物が続く。そして目の前に広がった光景は!えぐられ、鉄筋がむき出しになった建物。1階部分がなくなり、2階部分が下に落ちた建物。基礎だけを残し、跡形もなく流された建物…。打ち上げられた舟。地盤沈下した道、港。修学旅行の最終日、買い物を楽しみ、物珍しく覗いたシャークミュージアムを併設した大きなお土産ショップも消えてしまっていた。

大島も相当な被害にあっていた。歩くたびにキュッキュと鳴る十八鳴浜も地盤沈下して浜が狭くなり、水に濡れた砂は歩いても鳴ることはなかった。様々な体験を提供してくれた町並みもない。パーベキューを楽しんだ田中浜に新設された建物は無惨にへし曲がり、瓦礫や車、生活雑貨と区分けされたゴミの集積場所となっていた。美しかった松並木も相当な被害に遭っていた。

津波が押し寄せ海水が上がったとき、島は3つに分断され、気仙沼で起きた火事の日が海を渡ったときに山の上まで上がった火にリフト乗り場を焼き焦がしたということだった。タクシーで訪ねた陸前高田は更に被害が甚大だった。町を丸く囲む山裾を抉ったようにして総てが流されていた。残ったのは一本松と鉄筋の研修センターと小学校の枠のみであった。

畠山さんの住む唐桑半島も同様の被害を受けていた。私たちが見たのはほんの数カ所である。この被害が北関東から青森の沿岸部全域に渡っているのだと想像すると絶望的な気持ちになる。

まだ、何も復旧していないのだ。1年経ってもあれだけ多くのボランティアが入っても、片づけさえも終わってはいないのだ、今回、東北を訪れての実感である。

出会った人が語ってくれた震災の現実はずさまじかった。訪ねた畠山さんはお母様を津波で失い、養殖筏も舟も総て失ってしまった。乗車したタクシーの運転手さんは、会社に車を置いたとたん、津波が押し寄せてきて山に向かって走って逃げたそうだ。もう一歩遅ければ、波にさらわれていただろうと言う。もう一人は透析が必要なため、軍用機で秋田に疎開し、3ヶ月後やっと帰れたと言う。家族を津波で失った方々の話も伺った。家や店舗を津波で流された方の話も伺った。その方々が、命があるのだ、亡くなった方の分も頑張って生きるのだと言い、こうして東北に来てもらえるだけで嬉しいとおっしゃっている。復興には相当な時間がかかるだろう。離れて暮らす私たちに求められるのは、常に東北の現実を把握し、必要な支援を考えられることを実践していくことだと思う。ハロードリームの活動を続け、更に広げることが今の私にできることの一つ。一人でも多くの方のメッセージを届けることで被災地の方を元気にしたいと考えている。



10年アリガトウ・プロジェクト

★ 世田谷区立八幡中学校平成14年度卒業生の皆さんへ ★

3月11日の東北大震災で、私たちが修学旅行でお世話になり、美しい景色と共に心に残っていた気仙沼は、地震・巨大津波・その後の火災で、壊滅的な状態になりました。

テレビが映す映像に言葉を失い、心を痛める日々でしたが、休暇村の本部に連絡が取れて、気仙沼大島のスタッフの無事を確認し、畠山さんの無事も確認できました。その後、気仙沼市の危機管理室と連絡を取り、どんな物が必要なのかを確認を取りながら物資を集め、4月1日に成人式のお祝いをした鳥小屋に有志が集まり、物資の箱詰めや手紙を書きました。宅急便での手配はメグさんがしてくれました。その時点では、畠山さんに直接連絡する方法がわからず、みんなで心配しながら気仙沼市という大きな枠にしか支援できませんでした。

第一回の支援活動では、集まったお金の中から5万円相当の肌着類を問屋を通して送り、メグさんから連絡は行っていると思いますが、介護用品や赤ちゃん用品、医療品や文房具、食料品や衣料品などを送っております。

その後、畠山さんの記事が再び新聞に載ったので、新聞社に問い合わせ（個人情報保護で教えてもらえなかった）NPO「森は海の恋人」を通して住所を教わりました。（震災直後は事務局も被災していて、インターネットでもわからなかったのです）でも、励ましのお手紙を出す以外に畠山さんの再起に向けての活動を支援する道はないかと考えていて、NPOハロードリーム・10年アリガトウ・プロジェクトの活動に行き当たりました。

今、たくさん義援・支援のための物資やお金が寄せられていますが、国や自治体が窓口のものはなかなか活用されていない実態が報道されています。NPOハロードリーム・10年アリガトウ・プロジェクトでは、具体的な支援先に直接支援にあっているということです。その一つが大船渡市だそうです。今回の震災で被災した子供たちの支援を中心に精力的に活動されている様子を伺い大変な感銘を受けました。そしてこの活動を広げていくためにそうした支援先を求めているということです。私達のように支援先がはっきりしているところとのパイプ役にもなってもらえるということです。

NPO法人ハロードリーム・10年アリガトウ・プロジェクトでは、サンリオと提携していることで、キティちゃんのマーク入りのロゴがあります。それを七宝焼きのバッジにし、購入してもらうことで、その代金を様々な支援に活用しています。又、個々の具体的な支援対象に対してメッセージカードを書いてもらい、まとめて手渡してくれるという活動も合わせて行っています。

そこで次のようなプランを考え、八幡中学校の支援活動として立ち上げたいと考えました。

- ハロードリームのロゴであるバッジ（七宝焼きの可愛いもの）とキティちゃんロゴ付きメッセージカードを1,000円で購入する。畠山さんに宛てたメッセージカードを記入する。
 - 八幡中の卒業生を核にして、職場や友人へ輪を広げる。
- メッセージカードと集まったお金をNPOハロードリーム・10年アリガトウ・プロジェクトに送る。（活動の核になってくれる人を募ります）
 - 集まったお金から諸経費を差し引いた金額と、メッセージカードはNPOハロードリーム・10年アリガトウ・プロジェクトからNPO「森は海の恋人」へ送付する。
- 畠山さんの活動再起の一助にする。
- この活動の中で、他の東北支援プログラムを教えてもらい参加できるものに協力する。
 - 丁度多くの人が社会人としてスタートを切ったばかりで多忙なことと思います。現地に行ってボランティア活動は無理でも、自分のまわりの人に声をかけて息の長い支援活動を始めましょう。

2011年10月23日 鳥小屋集合

連絡先：宇野より子 m-12-unoppi-d-03@ezweb.ne.jp

倭文年江 Onp520503874g8h@ezweb.ne.jp

NPO 法人ハロードリーム・10年アリガトウ・プロジェクト（内閣府承認）
責任者：難波三津子（なんばみつこ）
〒154-0003 東京都世田谷区野沢4-20-13-213 カナディアン・アカデミー・セタガヤ内
TEL 03-5715-3670 FAX 03-5712-3671
E-mail m-namba@hello-dream.com URL http://www.hello-dream.com/

★

難波三津子様

ご丁寧なメールをありがとうございました。私たち教員も生徒も、今こそ具体的な行動を、持続させなければならないと、強く考えています。難波様のようにバワフルに活動されている方と出会えたことは生徒にとっても一歩前進する機会となります。本当にありがとうございました。今後も本校とつながりを持っていただければと思います。よろしく願います。
新宿区立新宿西戸山中学校 校長 新藤久典

10年前に修学旅行で訪れた地に、当時の同僚達と一緒に3月24日～26日にやってきた。

成人式を迎えた生徒達とは、2年前に“植林した木が大きく育った頃に来たいね”と話してはいたが、2011年3月11日の大震災と津波で壊滅した町に、1年もたつてからやってきたのには、2つの理由があった。震災直後は卒業生や同僚の有志が集まり、気仙沼市という大きい枠への支援物資を送り届ける活動をするのがやっとだった。

でも修学旅行でご縁のできた畠山重篤さんが最愛のお母さんを津波で亡くし、養殖に関する全てを失っても“漁師は海から離れて生きられない”と前向きにとりくんでいる姿をTVや新聞の報道で目にして、NPO“森は海の恋人”の活動とメッセージカードでの励ましをしていこうと、10月末になって八幡中の生徒達によびかけ“畠山プロジェクト”を立ちあげた。カンパ活動は微々たるものだけれど漁業再開をめざす畠山さん達に応援エールを直接届けたかったのが1つめの理由だった。予定では超多忙の畠山さんは私達と入れちがいに東京へ出張だったけど、夜中に戻ってきて下さり、無事に会うことができた!!

2つめの理由は、修学旅行で宿舍として使った気仙沼大島の休暇村が秋になって営業を再開し、「泊りに来て下さることが支援になります。」という案内を見たことだった。私達は若者のように体力があるわけでないし、インターネットを自在にあやつることもできないし、ただただ案じているしかなかったけれど、東北の地に出かけていき、自分の目で被災地を見て、旅のあいだに知りあった人からお話を聞き、感じとることならできる。その体験をまわりの友人や知人に伝えていくことで輪を広げていくことができるのではないか。長いスタンスで支援していこうとするのなら、気仙沼へまず行ってこよう、春休みを利用してプランをたてたのだ。

2泊3日の中で気仙沼の港周辺と屋台村に立ち寄り気仙沼大島では亀山に登り、十八鳴浜や田中浜を歩き、大きな船が残っている鹿折地区の献花台に花を手向け、畠山夫妻にお会いした唐桑半島、一本松が残っている陸前高田と見てまわった。

行く先々の電車の中、船の中、タクシーの中や浜辺等で知りあった人達とお話をした。休暇村のスタッフの方にも忙しい中で時間をとってもらった。そして、どの人も誰かしら親族がなくなっていたり、家が流されたり、知人、友人が流されていくのに手を合わせるしかできなかった…と、心に深い傷を抱えていた。ただただ、うつむいてお話を聞くのがやっとだった。おフロで一緒になった元気なおばさん達も“一周忌でこうして残った仲間で来ているのよ”と、一年たっても見かけはおだやかに明るい人達が、癒えることのない思いを抱いている人がたくさんいるのだとしみじみ思った。

そして、震災直後のように、生活につながるいろんなものが散在している状態から全てがとり去られ、港のはずれや人がいかない場所に運ばれて、土台だけが残った360° 見回して、全て、何もない広大な土地をみるのは、とつても切なかった。ここに仕事場や住居があった人達はどこでどうしているのだろう、どうやって生活を再建できるのだろうと、シーンと静まりかえって時間がとまってしまったような状態を見て胸が苦しくなった。

それでも、“海の回復は早いですよ。海と一緒に生きていけるよう、村のみんなど力を合わせています。”という畠山夫妻のお話を聞けたり、私達がこうしてでかけてくることがちゃんと支援になるのだ。新しい親籍や友人ができるくらいの支援づくりにつながるのだと実感できたことが一番の成果かもしれないと思っている。

